『 北国街道 西脇往還“善光寺道” 』を歩く

《第３回目：5/２３・２４ 泊り》

＜初日＞

坂北駅に正午に集結して、青柳宿～麻績宿～最後の峠「猿ヶ馬場峠」までの予定だ。駅構内で昼食を済ませて駅前の街道筋に出る。桝形を曲がるといきなりの坂道で両側の各戸玄関脇には屋号が掲げられている。また各戸下側に積み上げた石垣の一角には用水を流す石垣水路が組み込まれており、この日も用水が流れていた。

本陣兼問屋の青柳家は、黒板塀と黒門に囲われた庭と池があり、用水の取入口も残っている。

青柳山城跡への登り口手前に古びた山門がある清長寺に立ち寄ったあと、青柳宿を抜けて大切通し・小切通しに向かう。

切通しは二つあり「大切通し」手前の岩面には磨崖仏や大小の石仏が多数ある。切通しは４層に分かれていて（四回に分けて掘ったので）初代の切下げ跡は、現在の道路面からは５㍍も上にあり、先人の苦労が偲ばれる石工のノミ跡がはっきりと見てとれた。

二つの切通しの先の高速道下をくぐり、犀川支流の麻績川を渡ると、国道に合流ししばらくの間は歩道歩きを余儀なくされた。一口坂手前に「下井堀一里塚」碑があり、この先から旧道に入り麻績神社鳥居を過ぎると、「姨捨山遥拝所」がある。この付近は古来より名月鑑賞の観月の里と呼ばれていたとか。東筑摩郡の生坂村・筑北村・麻績村方面からは【姨捨山】の名称で、更級郡の坂城・戸倉上山田・屋代方面（現千曲市）からは【冠着山】と呼ばれているようだ。（でも篠ノ井線の駅名は反対で、松本側に冠着駅・善光寺平の稲荷山・篠ノ井側には姨捨駅だが…）

麻績宿には新旧二つの本陣がある。掛け看板「うす井」がある本陣瀬戸屋と、上段の間や用水をまたぐ石造りの太鼓橋を持つ本陣中橋家だ。両本陣とも臼井姓で、瓦葺屋根の門と両側に瓦葺の土塀が延びている。中橋家の老松は土塀の屋根を突き抜けている程だ。

この頃からとうとう小雨が落ちてきた。麻績宿外れの桝形先には口留番所跡があったようだ。海善寺横から国道４０３号線と並行している旧道を猿ヶ馬場峠（聖高原・聖湖）に向け登り始める。民家の庭先をかすめるように歩く個所もある。善光寺道の道標が整備されており迷うことも無く、快適なペースで進む。橋詰で小休止後、更に登ってゆく。右手に「市野川一里塚跡」碑がある。この先、街道は３個所で国道を横切る。馬の水飲み場や弘法清水の脇に悲恋伝説？の「お仙茶屋跡」碑、石畳の句碑の道を抜けると目の前が急に開け、聖湖が現れた。

聖高原観光案内センター前に、宿からの迎えの車がピッタリ５時に到着したので乗り込む。先程横切った国道と街道の出入口を見ながら、一気に麻績宿へ下る。ここでも「さっきこの本陣見たよね！」と言っているうちに宿に着く。６時からの夕食時間を遅くして貰い、急ぎ温泉で汗を流してから、多少値は張った美味しい夕食を堪能した。ただ村営の関係か時間制約があり食堂では長居出来ずに、この秋の計画については部屋で行う羽目になり残念!

＜２日目；街道歩き最終日＞

昨日夜半から本降りの雨になったようだが、今朝はメンバーの日頃の行いが良いのでしょう！天候も回復しガスの切れ間にアルプスが見え隠れする野天風呂を満喫する。

宿から送りの車で、昨日到達した聖高原（聖湖）へまっしぐら。

聖湖の中の桟橋「街道歩道」を歩き、土手道から国道に戻り少し歩いた先が、猿ヶ馬場峠だ。

ここからは国道を離れ、林道と街道が交差を繰り返している。街道は昨夜の雨で足元がぬかるむ個所もあるが、道端の山菜採りを楽しみながら、良く整備された道標に従い念仏石・馬塚・茶屋跡などを見て、どんどん高度を下げてゆく。

途中には、「火打石一里塚」東塚がしっかりと残っていた。

（西塚は林道拡張により消滅したとのこと）

また、旅人が善光寺平を望めた「のぞき」という案内場所もあった。

廻国供養塔の手前で、同期生（３組）の地元八幡在のW.R氏が出迎えてくれた。

彼の先祖が開基したという開眼寺で、善光寺道の難所である「３つの峠」を無事に越えてこられたことに感謝して参拝する。篠ノ井線を渡った先には、I.N氏が所望の「姨捨正宗」長野銘醸所（和田家）があり、酒蔵見学と試飲を楽しむ。昼飯前ですきっ腹にアルコールが良く廻った。

同期生は蔵元の本家筋で、狭間がある土塀に囲まれた旧家の内庭でお茶を頂く。

勿論茶請けは酒蔵の粕漬けだった。

（写真右端が同級生W.R氏）

これからの行程と時間の制約もあって、奥方にお礼を述べて、間の宿「桑原宿」へと急ぐ。

和田川を渡り、桝形を曲がると桑原宿（間の宿）だ。桑原宿本陣は１８年前までは残っていたそうで、跡地にはその立派な写真が飾ってある。

街道を挟んで松代藩在郷武士であった関総本家の建物＝伴月楼記念館がある。

【詳細：＊註２　参照】

伴月楼記念館には佐久間象山先生の資料等もあるとのことだが、残念ながら休館だった。（去年、M.Y氏と訪れた際も休館だったが…）

桑原宿を出て、一里山の一里塚を過ぎた辺りのスーパーで、昼飯を予定していたが、休みのため先を急ぐことに。県道長野上田線と善光寺道が合流する角に、道標がある。

「右 西京街道　左 八幡宮道」明治初期のもののようだ。

ここから稲荷山宿に入ってゆく。最初の角には阿弥陀堂があり、その先の屋代方面から千曲橋を渡ってきた新道と、街道との角に洒落たレストランがあり遅いランチに。ここで予想外の展開に。お店のスタッフが「蔵の町稲荷山」のガイドさんに連絡されて、急遽稲荷山宿を案内して貰うことになった。

勝手を言って時間を区切らせて頂き、伝統的建造物群を駆け足でご案内頂いた多謝！

桝形から稲荷山宿を出て、篠ノ井追分を目指す。午後の陽射しを正面に受け、暑さが厳しく喉が渇き、道路脇の自販機を探す事が多くなる。ＪＲ稲荷山駅が近づく辺りの左側に、広く長

い参道を持つく立派な大屋根が挙がる「康楽寺」が現れる。

法然・親鸞・西仏坊の旧跡がある寺だそうだ。ここでＹ.Ｒ子さんとお別れだ。お疲れ様でした。善光寺道歩きの立案から宿手配・道案内に大変お世話になった。感謝！

（後刻　メールで無事に１本早い電車に間に合い松本に戻れたとの事で安心した）

聖川を渡り、高速道を潜り先を急ぐ。塩崎の一里塚跡標識を過ぎる。この先で、北国街道が合流してくる追分の筈だが…。

更に急ぐと懐かしい「篠ノ井追分」石柱が見えた。Ｙ.Ｒ子さんが先程離れていないのは残念至極だが、最後に記念写真を撮る。

ここで、M.Ｙ氏が車で帰宅とのことでお別れした。

残りのメンバーで、北国街道を更に篠ノ井駅方面に向かう。線路沿いの近道とおぼしき道を探して黙々と歩く。途中勘違いで遠回りする失態もあり最後はラストスパートを強いてしまい反省しきり（そう言えば「松代道」最終日にも、屋代高校前駅までのラストスパートした苦い思い出がよみがえったが…）それでも当初予定の電車に夫々が乗車でき、各自帰路に就けて一安心でした。２日間大変お疲れさまでした。

『北国街道西脇往還（善光寺道）完歩でき、やったネ！』

※２日間歩行距離２１㌔／所要時間１１Ｈ３０Ｍ

参加メンバー；山浦るみ子(8) 宮下明子(9) 池田有美子(69)

石井則男(4) 宮澤康元(5) 磯村雄二(3)

＊《註２》　※（64 期同期生５組 関 哲氏より情報提供を頂きました）

・関総本家・伴月楼について；

武田勝頼が長篠の戦いで敗れ、それを機に上杉景勝が北信濃に攻め入り、現千曲市松代全域を領地とし、松田盛直(仁科盛直)を稲荷山城代にして統治していた。

1598 年上杉景勝の会津１２０万石への移封に伴い、松田盛直（仁科盛直）は弟に八幡神社の神主職をあずけて会津に移る（関ケ原戦い後、米沢に転封)。

1622 年真田信之が上田から松代に移封になり、現千曲市と松代地区は松代藩になり、桑原宿も松代藩の領地であった。

なお稲荷山は上田藩(仙石家・松平家)飛び地となりその後は商業地区として栄えた。松代藩の恩田家老の財政改革により 1770 年ごろに関家は在地居住を認められて松代城下から桑原郷に

移り住み在郷武士として、決められた登城日の前日に、桑原から松代まで通い定借屋に泊まりお勤めをしていたと聞いています。

関総本家は、江戸時代の末期に建てられた門正面の書院造りの武家屋敷と長屋門と土塀の建物全体が伴月楼と命名されて現存しています。元は 3000 坪の敷地でしたが、一部を千曲市に寄贈したものの現在でも 1500 坪の敷地を誇っています。

元治元年に佐久間象山が徳川慶喜の命により京都の警護に上洛する際に、松代からの旅立ちの最初の宿として関総本家に一泊して京都に向かっています。

佐久間象山が関総本家に泊まった際の書院や、佐久間象山の書などは、保存管理が大変となり、千曲市や長野県歴史館に寄贈し、現在も秋まつりの際には、六文銭（六つ連戦）の高張提灯を長屋門に飾っているそうです。また勝海舟の妹が佐久間象山の正妻として嫁いできた時の白無垢の着物が、今でも関総本家には保存されているとの事です。ただ伴月楼記念館は、管理が困難になっているとの事で休館中です。（以上）

写真説明；

格子戸で中に入れない為に上手く撮れていませんが、看板【象山佐久間先生御泊の処】と記載されています　(磯村)